日本医史学雑誌第三十六巻第三号
平成二年七月三十日発行　平成元年十一月二十九日受付

出島蘭館医カスパル・シャムベルゲルの生涯について

ヴォルフガング・ミヒェル

彼に因んで名付けられた「カスパル流外科」の父としてカスパル・シャムベルゲル Caspar Schamberger は日本の医学史上もっとも著名な人物に属している。これは「キリスト教の世紀」に、イベリアの宣教師によってもたらされた「南蛮医学」に次ぐ最初の流派で、さらに「紅毛医学」が続き、その影響は一九世紀の開国に至るまでしだいに大きくなっていった。(一) 一六四九年から五一年まで滞日し、オランダ東インド商会で働いたその元祖ともいうべきカスパルは、後世に与えた影響を決して知る事はなかった。出島商館の日記やその他の文書は、彼の活動について所々で触れてはいても、たいていはたんに Chirugijn とだけ記してある。普通だったら彼の名は世に知られるようにはならなかっただろう。しかし一六九四年、公使アンドリース・フリシウス Andries Frisius と江戸へ行き、徳川家光の謁見を待っている時、思いがけない事が起る。シャムベルゲルと使節団の仲間三人は、使節団が戻っても、しばらく江戸にいるよう日本側から要請された。こうして彼は合わせて約一〇ヵ月、通常はきわめて閉鎖的な国の政治的中心地に滞在し、病人の治療や日本人医師の指導にあたった。彼は多大な報酬を得て長崎へ戻り、間もなく次の江戸参府にも改めて参加した。そして一六五一年秋には日本を離れている。彼の日本人「弟子」やその著作も日本医史学の文献にしばしば現れる。とくに日本の著者はこれについて詳細な分析を行っている。それに較べると、シャムベルゲルに関する数少ないヨーロッパでの研究は、興味を引くものがない。しかし研究されているのは日本での二年間だけで、シャムベルゲルの残りの人生や出身地についてはほとんどわか

っていない。彼の正確な名前さえ文献によってさまざまであり、その結果、いろいろな記述が見られる。

私は、これまで知られていなかったシャムベルゲルの経歴について、クリスティアン・アルノルト Christian Arnold 編で一六七二年に出版された論文集『三大王国、日本、シャム、朝鮮について』を読んでいて手掛かりを得た。日本についてはここでは元平戸商館長カーロンがおもに書いている。アルノルトはフランソワ・カーロン François Caron の日本論に対する「ハインリッヒ・ヴァーゲネル Heinrich Wagener の注釈」を加えている。医学のことは、商人であるカーロンにはそれほど重要でなかったようなので、自分でも日本をよく知っていたヴァーゲネルが注を付けている。

彼らの医師に関しては、その何人かは、とても経験豊かだったようである。脈をとると、その人の病気がすぐにわかったし、またその病気のこともよく知っていた。それからわかりやすい処方箋を書いたが、たいていは錠剤であった。彼らは土茯令 *Radix China* (一一) についてもよく知っていたが、外科については経験を持っていなかった。(三)

百科全書的な野心を持っていた学者である編者アルノルトの目から見れば、このような記述ではまだ不十分だった。彼は手に入る日本文献を読み、帰郷者や東インドを知っている人と交流し、あちこちに詳細な注釈を加え、中には本文よりもかなり長いものもみられる。この箇所の注は、こうなっている。

ここ日本では外科医（ほとんどが東インドにやってきたドイツ人）はとくに人望がある。日本人が彼らを必要とするときは、自分の町に連れて行った。そこへは他の人は（どんなに望んでも）行くことも、その地を垣間見ることも許されなかった。たとえば、メルクライン Mercklein 氏が日本にいた時、長崎の貴族がピッチで足を火傷し、オランダ人に外科医を要請した。その時選ばれた外科医は他の外科医 Oberbarbirer のために便宜を計り、傷はひとりで治療できるような性質のものではないと称して、毎日もうひとりの医師を伴った。その後、外科医とその助手 Unterbarbirer は二人の検使 Benjois と通辞に伴われることになった。彼らは治療後、帰途特別に毎回少し先の通りまで連れて行ってもらえるようになった。しかし、メルクライン氏は、遠くからでは寺院の美しい建物や墓地以外には何も

見えなかったし、そこへ行くことも許されなかった。こうしてオランダ人外科医は、治療後、日本人から多大な贈り物を与えられた。C・シャムベルゲル氏（現在はライプツィッヒ Leipzig の大商人）も当時それにあずかったひとりである。つまり四人の武士、または Benjois が骨折りに対する贈り物を台、または駕籠 Palakin に乗せて、彼のもとに公式に持参した。日本人は生来派手好きで、人に見られることを好むのである。その贈り物は絹の服、Sackie と呼ばれる日本のワイン、さらに長円形の金貨であった。この金貨はしかし（残念ながら）国外へ持ち出すことはできず、彼らの貨幣制度に従って銀に換えなければならなかった。その代りに（船が着くとすぐにオランダの書物を調べ、その図に十分気をつけた）あの検査官たちも、とりわけ外科や薬草を扱った医学書を（おそらくあの医術に対する特別な好意から）オランダ人に渡した。みだりに口外しないという条件つきではあったが。(四)

アルノルトはシャムベルゲルの所在地のみならず、彼が本来の職を辞し、今度は大商人になっていたことも知っていた。この情報は、おそらく先の引用中に触れられているドイツのヴィンスハイム Winsheim 出身のヨーハン・ヤコブ・メルクライン Johann Jacob Merckleinによるものだろう。メルクラインは一六四四年から五四年にかけて、やはり理髪外科医 Barbier として東インド商会で働いていた。五一年、彼の船ポーランド王号 Koning van Polen 号はシャムを出港し、八月三日から十一月一日まで長崎に寄港していた。同僚であり、同国人でもあった彼はシャムベルゲルとこの時期、密に交流があったはずだし、さらにオランダ人は活動の自由がきびしく制限されており、この滞在は辛抱を強いられるものだった。アルノルトの伝えるエピソードでは商館にいたシャムベルゲルを "Oberbarbirer" と呼んでおり、彼は入港した船の不幸な同僚たちを、身分の高い日本人の治療のために、順々に長崎の町へ連れて行った。その中にはメルクライン自身もいて、おそらく、もっと見物したかっただろう。ポーランド王号がバタビアに向かって出航したとき、前商館長ピーテル・ステルテーミウス Pieter Sterthemius とならんで、ヨハネス・ヴンクス Johannes Vunks と交代したカスパル・シャムベルゲルもおそらく乗船していたと思われる。旅は五一年十二月十二日まで続いた。メルクラインとシャムベルゲル

の交流は二人の帰国後も途絶えることはなかったようである。でなければライプツィッヒの指摘はなかっただろう。シャムベルゲルは、したがってオランダ人ではなくドイツ人である。実際ライプツィッヒの市立文書館での研究で、この事実が確認された。一六三九～八三年の戸籍簿に次のように記載されている。

一六五八年十一月八日、商人カスパル・シャムベルゲルは、ライプツィッヒに生まれたが、父はカスパル誕生の一年後に市民権を取得したため、カスパル自身が四〇ターレル銀貨を支払って宣誓をした。(五)

つまりシャムベルゲルはずっと出生地の市民であったわけではなく、一六五八年帰国後にやっと市民権を得た。父バルタザール・シャムベルゲル Balthasar Schamberger（ケーニクスベルク Königsberg の商人）が一六二四年八月十三日に市民権を得たことは一六一二～六六年の戸籍簿に記載されている。(六)

ワイン商人としてフランケン Franken 地方からライプツィッヒに来た父親は、一六二二年九月三日に、当市の商人の娘マルタ・フージンゲル Martha Fusinger と結婚する。(七) その子カスパルは一六二三年九月十一日に生まれ、翌日トーマス教会で洗礼を受けている。(八)

バルタザール・シャムベルゲルは一六二九年すでに亡くなっているが、未亡人は猶予期間の後、一六三一年五月二十四日に再婚している。(九) このような状況は、若いカスパルが、東インドで運を試そうと決心する原因のひとつにもなったのだろう。さらに、ライプツィッヒが三十年戦争によって再三にわたり損害を蒙ったことも忘れてはならない。

シャムベルゲルは五八年に出生地ライプツィッヒの市民権を得ているので、遅くとも一六五七年の帰国船でバタビアを後にしているはずである。彼が日本の医学史上で果たした重要な役割から、彼が大学教育を受けた医師であったと思いがちだが、しかし博士号ならライプツィッヒの記録に記されていたはずだし、また正式に開業できる医師の免許があれば、故郷でもある程度の高収入と社会的な名声を得ることもできたであろう。しかし彼は帰国後、商人としての地位を選んでいる。したがって、おそらく彼は、東インドでは Barbier として働いていたのではないだろうか。東インド商会の商人た

ちはその記録に Barbier をたいてい Chirugijn つまり外科医として記している。

十五、六世紀のライプツィッヒにはバルビール・ギルドがあったことが証明されており、さらにマイスターになるためには十六世紀には一一年間の勤続年数が必要だった。[10] 十七世紀も同じだったようである。彼の外科医としての教育については判断できないが、年齢的には八～一〇年の外科医修業は可能だっただろう。船医として求職する際にオランダでは VOC の委員会で試験を受けることになっていた。アムステルデムは、その外科医ギルドに比較的きびしい基準を設けていた。応募者にはランセットの扱い、三杯の瀉血、外科と用具についての問答や死体の解剖が要求された。適当な死体が足りないとき、後者は行われないことも多かった。また、ミッデルブルク Middelburg では一六四八年頃でも、一定の金額を払えば合格できた。[11]

彼の後半生の記録ではシャムベルゲルは「市民にして商人 Bürger und Handelsmann」として登場する。ライプツィッヒ市立文書館にある、一六六九年から九八年のほとんどすべての関係書類には訴訟が記録され、それらは全部で一二三〇ページになる。[12] 彼の家庭生活も変化に富んでいた。一六五九年一月二十五日に、商人ドゥーゼル J. C. Dusel の、二十六歳になる未亡人と結婚した。[13] 長男はまだ妊娠中に死に、次男は一六六一年三月六日に生まれたが、四月四日までしか生きなかった。夫人は出産後しばらくして、三月十九日に亡くなった。[14] ゲーラウ Gerau の商人の娘、十七歳のレギーナ・マリア・コンラート Regina Maria Conrad との再婚は、一六六二年の十一月二十五日、ニコライ教会の近くにあるグリミシュ Grimisch 通りのシャムベルゲル家で行われた。この婚姻によって、シャムベルゲルは市の名士になった。義父は議会に関係しており、聖ヨハニ Johanni 病院の院長であり、商人だった。[15] 二人には息子が六人、娘が二人生まれたが、息子三人と娘ひとりは幼くして死んだ。レギーナ・マリアは一六八四年十一月十日まで生きた。[16] 六十二歳になる頃、カスパル・シャムベルゲルは、ゴットフリート・シュライヒェル Gottfried Schleicher の未亡人、三十九歳のオイフロジーネ・クライナウ Euphrosine Kleinau を妻にする。子供はなく、数年の後に夫人は一六八八年五月十八日に亡くなった。[17]

シャムベルゲル自身は当時としては驚くべき長寿で、八十三歳まで生きている。ライプツィッヒの埋葬記録には、彼が死んだのはグリミシュ通りで一七〇六年四月八日と記されている。(一八)

子供達のうち医史学上興味深いのは、エリーザベト・ロスト Elisabeth Rost との間の長男ヨーハン・クリスティアン・シャムベルゲル Johann Christian Schamberger（一六六七年六月二十一日～一七〇六年八月四日）である。(一九) 父カスパルはこの息子ヨーハン・クリスティアンが職業を選ぶ際に、若干の影響を与えたと思われる。クリスティアンはまずフライベルク Freiberg で鉱山学を、続いて医学をアルトドルフ Altdorf とオランダのライデンで学び、八九年ライプツィッヒで博士号を取った。さらにとりわけ開業医学、助産法、自然科学を学んでいる。九三年に医学部の助手 Assessor、それから化学の助教授、生理学の教授、そして解剖学の教授になった。珍しい物の小陳列室 Cabinet von raren physikalischen Sachen の所有者として実験の講義 Collegia experimentalia も行っている。ライプツィッヒ大学では解剖学教室 Theatrum anatomicum を設立し、学長にもなった。カタリーナ・エリーザベト・シャッヘル Catarina Elisabeth Schacher と結婚し、子供が四人生まれている。最初の子は祖父の名を取ってカスパル・フリードリッヒ Caspar Friedrich と名付けられた。末子のゴットヘルフ・アーブラハム Gotthelf Abraham という名には長寿の願いがこめられているようだ。父親の健康状態はあまりよくなかった。一七〇六年七月二十七日に遺言し、八月四日、父カスパル・シャムベルゲルの死後四ヵ月足らずのうちに、四十歳で没した。十八世紀に出たツェードレルの著名な百科全書によれば、彼は在職中に死亡したライプツィッヒ大学の三人目の学長だったようである。(二〇) 八月三十日に行われた身分相応の壮厳な葬式については、いろいろな文書に詳しく記されている。一七一四年に発行されたヨーハン・ヤコブ・フォーゲル Johann Jacob Vogel の『ライプツィッヒ年鑑』には父カスパルの肖像も載っている(図)。(二一) 莫大な遺産をめぐる争いは記録によると一七五〇年まで続いている。(二二) カスパル・シャムベルゲルとその息子が相次いで没したため、借金の返済規定や莫大な財産の相続が非常に複雑なものになってしまったためだろう。

すべての東インド旅行者が夢見る冒険と富を、シャムベルゲルはほぼ手中にしたといえるだろう。だからこそ不思議に思えるのは、このような人が何も書き残さなかったことだ。はるかに経験の浅いドイツ人たち、フォーゲル、ザール Saar、メルクライン等は、友人や知人に求められてかなりの記録を残している。運良く、私はこの点でも、シャムベルゲルの手書き原稿か、もしかしたら印刷物があるという証拠を突き止めた。ドイツ、ギーセン Gießen のヴァレンティーニ Valentini 教授（一六五七～一七二九年）は十八世紀初頭に『博物館またはあらゆる物質と香辛料の劇場』という医学的、文化史的に興味深い著作を出している。(二三) いろいろな植物や、あらゆる国々の薬に関する論文で、読書家のヴァレンティーニは『選定した書物と著者の概観』Conspectus Librorum et Autorum Allegatorum を前提にしているが、残念なことに当時の文献表示ではほとんど要約されてしまっている。ヴァレンティーニはこの表の中で "Schambergers Japonische Reiß = Beschreibung" つまり『シャムベルゲルの日本旅行記』を挙げている。残念なことに彼はその全著作中でシャムベルゲルの名についてはここでしか触れていないようである。だから彼がどこでシャムベルゲルを参考にしたのかは想像するしかない。おそらく、シャムベルゲルは、日本の植物、薬草や薬品について何かを書いていたのだろう。ヴァレンティーニはその出典がシャムベルゲルの印刷物からであったか、それとも手書き原稿からであったかを明確にしていない。したがって手書き記録からの出典の可能性も否めない。この資料の所在については、いろいろと手を尽くしてはいるが、これまでのところまだ手掛かりを得ていない。

図　カスパル・シャムベルゲルの肖像

文献および注

（一）宗田一『図説 日本医療文化史』一一三～一一七頁、京都、一九八九年。

（二）Rhizoma Smilacis Glabrae.

（三）Christoph Arnold: Wahrhaftige Beschreibungen dreyer mächtigen Königreiche Japan, Siam und Corea. [...] Denen noch beygefüget Johann Jacob Merkleins/von Winsheim Ost-Indische Reise [...]. 342, Nürnberg, 1672.

（四）Arnold, 343.

（五）戸籍簿 Bürgerbuch 1639-1682, 89.

（六）戸籍簿 Bürgerbuch 1612-1666, 96.

（七）Nikolaikirche の婚姻原簿 Traubuch 1609-1623, 288.

（八）Thomaskirche の洗礼簿 Taufbuch 1605-1625, 152b.

（九）Zentralstelle für Genealogie (Leipzig) の通知。

（一〇）Museum für Geschichte der Stadt Leipzig の Dr. K. Sohl 所長の通知。

（一一）Schoute, D.: De geneeskunde in den dienst der Oost-Indische Compagnie in Nederlandsch-Indië. 24-26, Amsterdam 1929.

（一二）市議会文書 Ratsakten, II. Sektion: S Nr. 120, H Nr. 96, T Nr. 84, S Nr. 310, P Nr. 90, G Nr. 158, Bd. I u. II, S Nr. 421, S Nr. 568a.

（一三）Thomaskirche の婚姻原簿 Traubuch 1646-83, 44b.

（一四）Zentralstelle für Genealogie (Leipzig) の通知。

（一五）Nikolaikirche の婚礼簿 Traubuch 1664-81, 125, No. 74.

（一六）Zentralstelle für Genealogie (Leipzig) の通知。

（一七）Zentralstelle für Genealogie (Leipzig) の通知。

（一八）市議会の死亡原簿 Ratsleichenbuch 1699-1707, 259b.

（一九）Zentralstelle für Genealogie (Leipzig) の通知。

(110) Zedler, Johann Heinrich: Großes volständiges Universal Lexicon aller Wissenschaften und Künste [...]. Leipzig und Halle, 1732–1750.

(111) Vogel, Johann Jacob: Leipzigisches Geschichts-Buch Oder Annales [...] biss in das 1714. Jahr. VIII, 1077, 61, Leipzig, 1714.

(112) 市議会文書 II. Sektion S Nr. 721.

(113) Valentini, Michael Bernhard: Museum Museorum Oder Vollständige Schau=Bühne Aller Materialien und Specereÿen [...] In Verlegung Johann David Zunners. Frankfurt, 1704.

(九州大学言語文化部)

Über das Leben des Dejima-Faktoreiarztes Caspar Schamberger

by Wolfgang MICHEL

Zur Herkunft Caspar Schambergers, dem Vater der japanischen 'Caspar-Chirurgenschule' existierten bislang keinerlei klare Belege. Einem Hinweis in Christian Arnolds "Wahrhaftige Beschreibungen dreyer mächtigen Königreiche, Japan, Siam und Korea" (1672) folgend, konnte ich hierzu einige Unterlagen aufspüren.

Schamberger wurde als Sohn des fränkischen Weinhändlers Balthasar Schamberger und dessen Ehefrau Martha am 11. September 1623 in Leipzig geboren. Der Vater starb bereits 1629, die Mutter heiratete 1631 erneut. Dies und der Dreißigjährige Krieg dürften Caspar veranlaßt haben, in den 40er Jahren in Ostindien sein Glück zu suchen. Nach der Rückkehr erwarb er 1658 das Bürgerrecht seiner Geburtsstadt und zog dem bisherigen Beruf des Barbiers den geachteteren Status eines Handelsmanns vor. Fast alle überlieferten Akten beschreiben Rechtsquerelen. 1659 heiratete er, doch Frau und Kind

starben bereits 1661. Von den acht Kindern der 1662 geschlossenen folgenden Ehe verstarben vier vorzeitig, die Mutter verschied 1684. Mit knapp 62 Jahren heiratete Schamberger ein drittes Mal und überlebte auch diese Frau, bis er schließlich im Alter von 83 Jahren am 8. April 1706 das Zeitliche segnete. Kurz zuvor war sein 1667 geborener ältester Sohn Johann Christian, Professor für Anatomie und Rektor der Leipziger Universität, gestorben.

Unter den Literaturangaben Michael B. Valentinis im "Museum Museorum" (1704) fand ich schließlich einen Verweis auf "Schambergers Japonische Reiß=Beschreibung". Bedauerlichweise machte Valentini nicht deutlich, wo er die Reisebeschreibung zu Rate gezogen hatte, doch mußte Schamberger u.a. japanische Heilmittel beschrieben haben. Zum Verbleib dieses Textes ergaben sich trotz intensiver Nachforschungen bislang keinerlei Anhaltspunkte.